

特集：やさしい日本語

多文化共生社会づくりを進める上で、言語はとても重要な役割を持っています。日本語が不自由な外国人の方とコミュニケーションをとる場合、ポルトガル語や中国語といった母語で話すことがもちろん最善ですが、近年は「やさしい日本語」の重要性が注目されてきています。今号では「やさしい日本語」について紹介します。

「やさしい日本語」とは、日本語が不自由な外国人の方々にも理解しやすいように、敬語や専門用語・方言の使用を控えたり、漢字ばかりの言葉を日常的な分かりやすい言葉に言い換えたりした日本語のことです。災害時に、多くの外国人の方々にも少しでも早く正確に情報を伝えるため取組が始まりました。もちろん、災害時だけでなく日常生活においても、「やさしい日本語」は様々な場面でとても有効な意思疎通のツールとなります。外国語が苦手な方でも「やさしい日本語」を心がけることにより、日本語が少し理解できる外国人の方となら、コミュニケーションが容易になります。また、自治体のHPや広報誌、防災パンフレットなどで次のように使われています。

「やさしい日本語」の例

- ・高台に避難してください → 高いところに逃げてください
- ・召し上がる → 食べる
- ・土足厳禁 → くつをぬいでください

今後、「やさしい日本語」は行政の場だけでなく、企業や学校の現場、さらに年々増加する外国人観光客向けの情報提供ツールとしても広く活用されていくことが期待されています。



▲「やさしい日本語」で表記された防災チェックガイド（公財）愛知県国際交流協会

この特集では日本語教育を専門とされ、「やさしい日本語—多文化共生社会へ」（岩波新書）を執筆された一橋大学国際教育センターの庵 功雄教授に「やさしい日本語」についてご寄稿いただきました。

多文化共生社会を作る〈やさしい日本語〉

◆ 災害時から平時へ：〈やさしい日本語〉の誕生

読者のみなさんは「やさしい日本語」という語を耳にされたことがあるでしょうか。この語は、このところ少しずつメディアなどでも取り上げられるようになってきましたが、その具体的な内容については、まだよくわからないという方が多いと思います。この小文では、私たちの研究グループの研究内容にそくして、「やさしい日本語」とはどのような概念で、どのようなことを目指しているのかについてご紹介したいと思います。

「やさしい日本語」が専門用語として初めて使われたのは1995年の阪神淡路大震災のときでした。このとき、情報が日本語と英語でしか出されなかったためにこの両言語が十分に理解できない外国人が復興過程においても被災したことの反省から、災害時の緊急性の高い情報を、簡単な日本語で出すための方策が考案されました。そうした日本語は「やさしい日本語」と名付けられ、現在も弘前大学の佐藤和之氏を中心に研究が行われています。

こうした災害時の外国人に対する情報提供は重要ですが、それと同様に、平時における情報提供も重要です。私たちの研究グループでは、そうした立場から研究を行っています。以下では、私たちの研究を上記の研究と区別して、「やさしい日本語」と表記します。

◆ 2つの〈やさしい日本語〉

〈やさしい日本語〉には、大きく分けて2つの側面があり、それぞれを、「居場所作りのための〈やさしい日本語〉」、「バイパスとしての〈やさしい日本語〉」と呼んでいます。

前者は、主に成人の定住外国人を対象とするもので、来日した外国人が、日本の中で精神的に安定した状態で生活できるようにすることを言語面で保証しようとするものです。

一方、後者はそうした定住外国人の子どもたちを対象とするもので、彼／彼女らが、日本社会で自立して生きていくための条件を言語面で保証しようとするものです。

◆ 地域社会の共通言語としての〈やさしい日本語〉

「居場所作りのための〈やさしい日本語〉」には3つの機能（初期日本語教育の対象、地域社会の共通言語、地域型初級）がありますが、ここでは、その中の「地域社会の共通言語としての〈やさしい日本語〉」という点に絞って述べることにします。

定住外国人が増えると、外国人と地域の日本人住民の間に共通言語が必要となります。

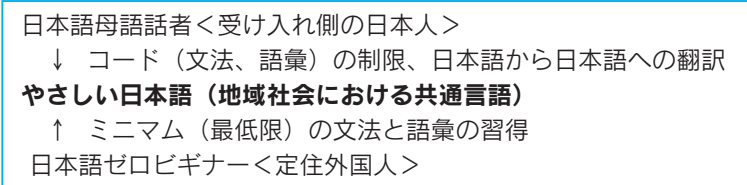
このとき、英語はそれに適さないことが調査でわかっています。つまり、定住外国人の多くは、英語よりも日本語の方ができるといえることです。また、地域の日本人住民にとっても、英語は使いやすい言語ではありません。

次に、日本人住民が調整を加えない「普通の」日本語ですが、これも適切な選択肢とは言えません。それは、こ

うした「日本人と同じように日本語を話せるようになったら、日本社会に入れてあげる」という考え方は、外国人を外国語の能力だけで評価するものだからです。もし、私たちが外国に移住することになった際、その国の言語が十分に使えないというだけで無能扱いされたらどう感じるかを考えれば、このことはおわかりいただけると思います。

そうすると、地域社会の共通言語になり得るのは、日本人住民が調整を加えた日本語、すなわち、〈やさしい日本語〉しかないということになります。しかし、これは、放っておけば自然にそうなることではありません。むしろ、自然に任せておくと、共通言語は生まれず、外国人住民と日本人住民は理解し得ないという可能性が最も高いと言えます。そうではなく、両者が理解し合えるようになるためには、日本人住民が、〈やさしい日本語〉を使って外国人とコミュニケーションをすることの意義を理解して行動することが必要なのです。次図は〈やさしい日本語〉が地域社会の共通言語になった場合の模式図です。

地域社会の共通言語としての〈やさしい日本語〉



◆ バイパスとしての〈やさしい日本語〉

次に、バイパスとしての〈やさしい日本語〉について説明します。

今後、日本が明示的に「移民」を認めるようになった場合、最も重要な問題の1つはことばの問題だと考えられますが、その中でも、「移民」の子どもたちのことばの問題は重要です。なぜなら、彼/彼女らが「まっとうに努力すれば」、日本人の子どもたちと競争して自己実現することができること（社会的流動性）が保証されていることが「移民」受け入れにおいて極めて重要であることは、ヨーロッパの事例などからも明らかだからです。

外国人の子どもたちは、日本人の子どもたちに比べ、日本語能力に大きなハンディキャップを抱えているので、社会的流動性を保証するには、それを埋める必要があります。この点から考えたのが「バイパスとしての〈やさしい日本語〉」です。その一環として、私たちの研究グループでは彼/彼女らの高校進学率を高めるための教材開発を行っています※。

※詳しくは次をご参照ください（読売新聞朝刊 2017.7.14）
<http://www12.plala.or.jp/isaoiori/yomiuri170714.pdf>



◆ 多文化共生社会と〈やさしい日本語〉：お互いさまの気持ち

最後に、多文化共生社会と〈やさしい日本語〉の関係について述べたいと思います。

多文化共生社会というのは、自分とは異なる文化を背景とする人どうしがつながっていくことで作られるものです。そこで重要なのは、上記の地域社会における共通言語に関する部分でも少し触れたように、自分のものの見方を少し相対化し、相手の立場に立って考えてみることです。地域の全ての住民が、そうした「お互いさまの気持ち」を持つことができれば、多文化共生社会は自然に作られていくはずで

す。〈やさしい日本語〉の「やさしい」には、「易しい」だけでなく「優しい」という意味も込められています。こうした2つの意味を持つ〈やさしい日本語〉が、多文化共生社会の形成に役立つことを心から祈っています。

「やさしい日本語」に決まった答えはありません。何が「やさしい」のかは、相手によって違います。例えば、中国から来た人にとっては、ひらがなよりも漢字で書いた方が伝わりやすいかもしれません。身近な外国人の方とのコミュニケーションが少しでも円滑になるよう、相手のことを考えて「やさしい日本語」をいろいろ試してみましょう。

(参考)「やさしい日本語」の手引き (2013) 愛知県県民生活部社会活動推進課多文化共生推進室

◆ 愛知県では、「やさしい日本語」の手引き～外国人に伝わる日本語～を作成しています。

愛知県県民生活部社会活動推進課多文化共生推進室（愛知県庁本庁舎2階）で入手できます。

また、あいち多文化共生ネットからもPDF版をダウンロードしていただけます。

<http://www.pref.aichi.jp/kokusai/tabunka.html>



「やさしい日本語」の手引きに関する問合せ

愛知県県民生活部社会活動推進課多文化共生推進室

電話：052-954-6138 E-mail: tabunka@pref.aichi.lg.jp